

研究・調査報告書

報告書番号	担当
2 2 5	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Adolescents' drinking habits predict later occurrence of traumatic brain injury: 35-year follow-up of the northern Finland 1966 birth cohort. 青少年時の飲酒習慣はその後の頭部外傷を予測する。北フィンランドの 1966 年 Birth コホート~35 年間追跡</p>	
執筆者	
Winqvist S, Jokelainen J, Luukinen H, Hillbom M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Adolesc Health. 2006 Aug;39(2):275.e1-7.	
キーワード	
青少年、飲酒、頭部外傷、前向き研究	
<p>要 旨</p> <p>目的： 青少年の飲酒習慣と頭部外傷の関係を調査した。</p> <p>方法： 1966 年生まれの 10,424 人の北フィンランドの青少年を前向き研究で追跡した。14 歳時点までの死者、国外移住者は対象者から除外した。14 歳時点で、飲酒の頻度と、酔っ払ったと感じる頻度を調査し、その後 35 歳まで追跡調査した。追跡開始(14 歳)以降の頭部外傷既往をフィンランド病院退院記録とフィンランド統計による死因記録を用いて登録した。</p> <p>結果： 非飲酒者と比較して、14 歳以前に 1 ヶ月に一度又はそれ以上飲酒した者、また時々酔っ払った者は 21 年間の頭部外傷の粗相対危険度が上昇していた。(頻回飲酒者 2.04 倍、酩酊既往のある者 1.42 倍(それぞれ統計的に有意)) 父親の職業、家族背景、居住地域、学校を調整すると、頭部外傷の相対危険度は頻回飲酒者 2.21 倍、酩酊既往のある者 1.35 倍(それぞれ統計的に有意)となった。</p> <p>結論： 14 歳又はそれ以前に頻回な飲酒することや、酔っ払うことは青少年で頭部外傷の危険度上昇につながる。青少年の飲酒を減らすための政策決定者のいっそうの努力が必要である。</p>	